17．子どもと波長が合わない里母の中にあった未解決の課題
－それに気づいてから子育てが少し楽になる

１)概要：

Ａ(８歳男児　２年生)６歳から２年間養育　初めての里子　＊被虐待児

２歳半まで実母が育てたが、途中から実父の暴力が始まって、２歳半で施設に入れたと聞いている。生活苦からか、実母の面会は全くなくて、その後実父も失踪したという。

＊里母の感じる虐待の影

１．注意された時に、意識が別のところに行ってしまう。以前は顔面蒼白、動けなくなった。話しかけても反応がなく、立ち尽くしたまま５分ぐらいボーっとしている。食べ物を皿から落とす、トイレで失敗した位の些細なきっかけで始まる。

２．失敗を、他人のせい物のせいにして、言い逃れようとする。嘘をつく。それを本当にそう思い込んでいる。失敗した物を隠すが、それを覚えていない。里母がいるかいないかで態度が変わる。

２)里親の家族構成：

里母は30代、里父は30代で勤務者。里母は６年間学校支援員をしていたが、仕事をやめて養育にあたる。

３)里親登録の動機

子どもに恵まれなかったので、里子を考えたが、里母の身内から、苦労することはない、別れて帰ってくるようにと迄、反対された。姪を養子にしたらという提案や、兄嫁にもっと子どもを生んでもらったらなどと。乳児や中高生では養育の自信がなかったので、３～５歳を希望した。交流期間は半年。夏休みは月に15日くらい。通常は週末に面会し、慣れた後４カ月間は、週末里親と言う形で１、２泊させていた。

４)事例

Ａ：８歳男児(２年生)

①施設ではよくできた子

Ａは施設ではよくできた子だったようだ。施設に置くにはもったいない子とまで言われたが、家に来てから予想外の行動をした。

注意されるとパニックを起こし、泣き叫ぶ。つじつまの合わないことを言い、そうじゃないと否認を続ける。その後はぼんやりした感じになる。30分ぐらい続く。途中で言葉をかけると、また泣きじゃくるので、そっとしておく。月に１度くらいだが、長い休みには注意されることが増えて、週１回位もパニックを起こす。

②成長と健康：

とても―低身長、過食、わりと―便秘がち、不器用

③性格：とても―わがまま、すぐ泣く、素直でない、小心、人に心を閉ざす、よく嘘をつく、よく約束を破る、反省心がない　わりと―甘えたがる、無気力、時々パニックを起こす

④学習状況：とくには問題がない。

成績は中の下、得意は算数(計算)、苦手は国語と算数の文章題、宿題は言われなくてもだいたいする。しかし集中力がない。友人関係はわりといい。

⑤親子関係：里母は、気もちが通じ合わないと言うより、子どもと波長が合わないのではと感じている。子どもの波長に合わせるのが苦手で、1、2時間が限度。後は疲れて寝てしまうので、里親失格かと思うという。初めはAに「おばさん」と呼ばせていたが、言い争いが続いて、里父が「お母さんと呼ばせた方がいいのではないか」と言い出した。「今日からはお母さんと呼ばなければいけない」と言って聞かせた。2、3回は我慢して注意するが、その後には遠慮せずに叱ることにしている。

⑤心配していること：将来里子であることで、もし何かつまずきが出てきたときに、里母として対応できるかどうか。気づかずに我を通すので、集団生活で人に迷惑をかけ、確実に孤立してしまうのではないか。言ってきかせても伝わっていない。

⑥委託の返上：
1.2度考えた。毎日2、3回も注意されて泣き、里母の様子をうかがいながら生活するAを見て、里母と生活しない方がこの子のためかとも考えた。「帰ってもいいよ」と里母がいうと、「帰りたくない」と本人。選択肢を与える意味で言ったのだが、一番言ってはいけない言葉だと自分の母親に言われた。カウンセリングを里親も子も何度か受けた。

⑦里母の中にあった未解決の問題
最近になって、自分は自分の親(15分の場所にいる)との間の父娘問題が解決していないことに気づいた。自分の父は支配的な性格で、しつけもそうだった。父は完璧を求める人で、失敗しないようにときっちりしつけをした。母は過保護すぎるほど、何でも手とり足とり子どもの世話をし、「あぶない、心配」と言って子どもに何もさせない人だった。里父の両親のしつけは放任に近く、里父は自由に育てられたようだ。こうした出生家族での自分の問題に理解ができてから、Aを育てるのも少し楽になった気がする。
次の里子の受託は、Aと話し合って決めたい。遊び相手がいたほうがいいかもしれないし、今のままでは逃げ場がないと思うので。(以上)

1．早く「本物の親」になろうとした里母の努力と迷いの日々
－3人の子どもの人格形成上に尾を引く虐待の影も様々

1)概要：
社会人女性A3は27歳(3歳から18歳迄養育)と大学生(A2)、高校生(A)の3人の虐待された過去をもつ里子たちは、それぞれ生育環境や資質上の特徴をもち、それによって現在の環境への適応や抱える問題もそれぞれの姿を見せる。

2)里親の家族構成：
里子A3(27歳女性)、A2(21歳男子)、A(16歳男子)と里父、里母の5人家族。A3は一旦外に出たが、昨年1月から「一人暮らしに疲れた」と言って、再び里親宅に同居している。家賃として、里親に25,000円支払っている。

３）里親登録の動機：
　里親夫婦は大学の先輩・後輩で、子どもに恵まれず、両親から勧められて里子を養育することになった。母親は里親になる際に占いで、里子の受け入れを決断した。

４）事例：
＜事例１＞保育士に愛されたためか、愛着障害が見られない？子
　今は社会人となった女性Ａ3(27歳)３歳から18歳迄養育
　Ａ3は１歳から３歳まで乳児院にいて、３歳から里家に。乳児院では保育士にかわいがってもらったらしい。そのためか、いわゆる愛着障害の子に特有な性格上の問題が見られない。初めの１、２カ月は、里母に好かれようとして、子どもの方で風呂桶洗いまでした子だった。

①親になろうとした里母の努力の空回り
　里母は通信で保母資格を取るなど、「頭でっかちの34歳（母親）」だったと言う。30品目の食事を作るなど心を込め、親子でおそろいの服を着るなど、懸命に親業につとめ、育児に疲れてしまう。
　Ａは途中で赤ちゃんがえりもして、２時間おきに目を覚まし泣く。里母は「この子さえいなければ楽になる。顔に毛布をかければ、と思ったこともある。間違えば、杉並の事件のようになっていたかもしれない」と言う。

②多数のサポート源に恵まれて
　杉並のような結果を引き起こさなかったのは、里父と（里子養育を勧めてくれた）祖父母によるサポートがあってのことかもしれない。里父は、里母がＡに手を焼いていた時に「あなたはよく頑張っている。ふつうなら10月10日おなかに入れておくが、その生みの苦しみだと思いなさい」と言った。「もしその言葉がなければ、もしおまえは母親としてダメだと言われていたら、自分はつぶれていただろう」と、里母。祖父母も、里子を「家に（遊びに）よこしなさい」と言ってくれ、里子と一緒にテレビをみるなどしてくれる。里親会の先輩からも「このままでは３年もたないのでは」と心配してサポート。養育家庭センター（当時）や〇〇養護施設にも電話し、「抱きしめて一緒に泣きなさい」と助言される。

③里母とＡで里父の取り合い
　その頃Ａは「お父さんは、どうして口髭を生やしていないの」と言い、里父はそれを受け入れて口髭を生やし、今でもそうしている。Ａ3は「自分は大きくなったら、お父さんと結婚する。お母さんは別の人と結婚して」など、まるで里母と里子が＜里父の取り合い＞をしたような状況だった。それに耐えられなくて、里母はＡ3を本気で怒り、ホテルに１泊したこともあった。

④理想の子どもに育てたかった
　里母は、赤毛のアンの愛読者で、「自分の家に来たからいい子になった」と言われたかったと言う。

＜赤毛のアン：モンゴメリ＞
　アンは生まれてすぐに両親を病気で失い、子守同然にこき使われたあと孤児院に送られ、愛に飢えた寂しい子ども時代を過ごした女の子。髪は赤毛でそばかすだらけ、目は大きくやせっぽち。子どもがいないマシューとマリラは、世間づきあいが苦手で、兄妹で寂しく生きてきたが、アンを育てることによって、初めて子どもを愛する喜び、子どもから慕われる幸せを知って、

温かな人物へと変わっていく。アンは勉強熱心で、ライバルに負けまいと優秀な成績で、クイーン学院を卒業して教員の資格を取り、さらにカナダ本土にある４年制大学へ進む奨学金を獲得するが、マシューの急死により、それをあきらめてグリーン・ゲイブルズでマリラと２人で暮らすことを選ぶ。

またA3をお嬢様に育てたかったと言う。A3をいい学校に入れたくて、進学塾にも通わせた。

⑤里母里子それぞれの成長

こうした夢と現実の隔たりから、６年目（A3が小学3,4年生）の頃、里母は「もうだめかもしれない」と思うようになった。「でも、その前にやることは全部やってみよう」と、児相で小３秋から夫婦カウンセリングを受け、A3は遊戯療法を受ける。帰りにはファミレスへ寄る。後日ＡはA2に「楽しかった」（食事が）と言った。

中学進学を目前にしてA3は「自分は（里母の望むような）お嬢様ではないから、私立でなく、いまの友人が行く公立中学へ進学したい」と言い出す。里母も「あの子はあの子、違う道を行くのは仕方がない」と思うようになる。塾も進学塾から補習塾に代えた。その塾の先生と気が合って、「おじさん、おばさん」の感覚で塾が居心地よく、生活面のしつけもしてもらう。中学までその塾に通う。

中学は小規模校で、PTAでも仲間に里親子と言っておいたが、みなで支えてくれ、地元に恵まれた。スポーツをしていて、高校は志望する都立の小規模校に合格し、里親姓でなく、「里親姓に飽きた」といって、自分の（元の）姓で通う。アイデンティティの模索が始まったのか。しかし期待していたスポーツ部は、残念にも２年で廃部となった。

⑦荒れ：居場所探しと自己確認への模索

高校進学の時に、養育家庭センターから実親のことをA3に話してもらう。（「真実告知」）。実親が自分を探しにこなかったことで、「２度捨てられた」と思ったかもしれない。その後、「自分はこの家にいていいのか」と居場所探しをするかのように「試し行動」が始まった。

行動が発展し、週末は友人の家に泊まるなどエスカレートしていった。何か言うと「干渉するな」という。高２の夏休みには、金髪に染め眉毛を落とし、レディースに入る。バイクをほしがったが、「車の免許を取ってからでないとだめ」と抑えた。しかし、夏休み終わりに、黒髪にして登校した。結局１年半でこの期間（試し行動）は終わった。

高３の１学期に「進学でなく、就職したい。自分は勉強が好きでないから」と言い出す。１度は、ばっちり化粧して面接試験に落ちたが、〇〇児童養護施設で面接の練習などを受けて合格。A3は「施設でワーカーが助けてくれた。自分は里子で（皆に愛され、親切にしてもらって）よかった。レディースでも＜おまえはここには向かない＞と言われた」という。自立へ向かう。

⑧就職：その後いくつかの小さい会社で、販売員をして現在に。

A3はレディース時代を振り返り、「実親でも愛されていない子がいた。自分は愛されている。仲間から『おまえは、（ここにいる）タイプでない』とも言われた。でも、塾や高校へ行っても、自分は遊んでいるだけ。塾のおじさん、おばさんから「『崖っ淵まで行っても、あなたは落ちない子』と言われた」と言い、それがインプットされてか、自信がついたようだ。

⑨里親としての努力：

①毎日、あなたが大好きとぎゅーっと抱きしめた。

②夫婦仲のいいことを、口に出して言おうとして、その努力をした。

③「あなたは根は真面目なんだよ」と荒れている最中から、何度も言ってあげた。夜中に里子の寝室に入って、布団をかけていたら、Aは（気付いていたらしく）、ある時「干渉はうるさいけれど、布団をかけるのはいい」と言った。

就職先にも、里親子だと言ったほうがいいと助言している。

現在は元気で働いている。

＜事例２＞引きずる愛着障害

A2は現在、大学生（男性）で21歳。被虐待児（ネグレクト）、愛着障害の存在を感じる。①６歳（入学直前）で里家に来る。１番目の里子A3が中学生になって「もう、下の子を預かってもいいよ」と言ってくれたので受け入れた。親が世話をせず、冷蔵庫に水しかない状態だったらしい。預かる前に半年間交流したが、なかなか家に来ると言わない。「お母さんが迎えに来た時、ぼくがいないと困るでしょ」と。「もう親は来ない」と児相で祖母に言われて、やっと里子になることを決心した子だった。

②盗み：友人のおもちゃを度々もってきてしまう。問いただすと、２時間も部屋の隅で固まる。施設にいたので、所有権の感覚が実感としてわかないのだろう。怒られないためのウソだったのだと思う。小１でも中１ぐらいの言いわけ能力（物語のようなウソをつく）をもっていた。小３では、友人のポケモンカードをとってきてしまう。２カ月して、やっと自分がとったと言い、友人宅に２人であやまりにいった。

この子も児相のカウンセリング（遊戯療法）に通った。A3（長女）が「カウンセリングは楽しいよ」と言ってくれ、〇〇児相へ５年間通った。「お母さんにバカ野郎と言えるようになろうね」とカウンセラーが言ったとか。里親が「もうカウンセリングはやめたら」と言っても、A2は楽しくて「まだ続ける」という。

③心が解けて、虐待されていた過去を話し出す。

次第に自分のこと、家でのこれまでのことを話すようになる。学園でいじめにあっていたとか、幼稚園では友達を泣かせていたとか。また自分の家では食べ物がなくて、コンビニの廃棄食品を食べていたとか。深夜ザーッとテレビ画面がなる（放送停止）まで、テレビをみていたと話す。実父母の喧嘩が度々で、親の喧嘩の時には自分が見つからないように＜固まっていた＞という。「自分の意思に関係なく種々処遇され、適応がさぞ大変だっただろう」（里母）。

④虐待された子の自立のむずかしさ：

都立高校に合格して、クラスにいたネグレクトの女子と仲良くなる。ネグレクト同士おたがいに相手が分かるようだ。里親の金を持ち出して、その子に渡したりした。２回ほど裏口から家に入って、下の子を床に寝かせて、子ども部屋の２段ベットの上に泊めたのが見つかる。そのネグレクトの子とは２年生でクラスが別になった。

高２の夏休みの最後に、明日から、問題をクリアしていこうと言って聞かせたが、しばらくして「自分が金を盗った、ごめんなさい」とあやまる。

その頃から、テレビを見て笑うようになる。勉強し始めるが、一旦落ちるとなかなか成績は上がらない。受験する大学のランクを下げるように言っても聞かない。ヤンキー先生（義家先生）をみて、「自分にも、ああいう先生ならできるかもしれない」と言い出して、教育学部を希望する。

受験に失敗してから、「学費は出すから、１人住まいしてバイトして生活するように」と自立させる。１浪して予備校に通うが、だんだん予備校にも家にも足が遠くなる。予備校に学園生活を期待して裏切られたらしい。９月にアルバイトをやめ、予備校で勉強することにする。

次の年、結局最後（３月）に福祉系大学に合格。奨学金をとり、50万ずつもらえることとなるが、しかしバイトが続かない。上司が叱ると委縮してしまって、やめてしまうので、仕事が長続きしない。すぐ引きこもってしまう。他の里親からバイトなど紹介してもらって、一時保護所のバイトなどするが、７月にそれにも行かなくなる。見に行っても部屋にもいない。やっと見つけたら、ボーっとすわっていた。すぐ「望まれて生まれた子ではない」から、「このまま死んでもいい」という考えになってしまう。

昨年９月に里親宅の３軒隣で、前の部屋の半額の部屋に引っ越した。別の奨学金を月３万円受けられることになったので、「里親宅からの金銭援助は、もうしない」と宣言した。頑張ってはいるようだが、A2は１月分の家賃を使ってしまった。授業料のための奨学金から家賃を支払った。

⑤里親子間にでき始めた心の溝：

その頃から里親里子の間に溝ができ始める。成長すれば一人前になるだろう、という里母の期待を裏切ったせいもある。定期代を使い込んでしまい、落としたなどと嘘をつく。本人が頑張っている様子なら応援のし甲斐もあるが、金銭感覚がない。例えばケータイの費用を月５万円も使ったり、部屋代を使いこみ、言いわけに嘘をつき、泣き落としのように、すぐ泣くなど。

９月からまたバイトを始めた。これ以上援助はできないと、安い部屋に引っ越させた。夕食には里家にくる。

⑥尾を引く虐待の影

「虐待された子は、結局元にもどってしまう。死なないように面倒を見てあげるという感じ。すぐ死にそうな顔をする。さみしい、怖い、辛い思いを体に刷りこんでいる子。そう言えば、小さい時に高い高いをすると、丸太ん棒のように固まってしまう子だった。

この人は大丈夫かといつも探っている。自分で自分を守るしかない。だから、里親との間にも、いつも溝がある」と里母。

弟（A3）が、「兄は目下の子にはいい関係を作れるのに」と言うが、A2は目上の人との関係が困難である。

＜事例３＞高いIQ ？が適応をもたらす？

Ａ：16歳、高校生男子、小４から４年間養育

被虐待児（ネグレクトで食事の虐待。継父との相性が悪かった。本人だけ別の部屋で食事させられたり、「食べなくていい」と言われるなど。ただし本人は後になって、当時から胃腸の働きがわるくて食べられなくて、また自分が頑固だったので、意地を張っていたこと、斜視のため目つきが悪かったと思う」と回顧する）

長姉Ａが中学になった時、「下の子を預かっていいよ」と言ってくれて、２番目A2を引き受けたが、３番目Ａも、２番目の兄A2が中学の時、「下の子を預かっていいよ」と言ったので、A3を引き受けた。里父と里母が毎晩（便秘の改善に？）マッサージをしてやる。兄と弟が仲良くしているので助かる。

①生育と健康：当初はむら食。ストレス性の胃腸炎で、ストレスがあると下痢と便秘を繰り返す。よくおなかを壊す。偏食、小食。便秘がち。里家で６年を経ても当初と同様な身体的トラブルがある。小６の時に斜視を手術した。

②性格：素直でない、頑固、少し；わがまま、小心、人に心を閉ざす。小４で来たので、対人

関係の対応はわりとできていたが、理屈屋さん。

③学習状況：高校は大学付属で、特進クラスにいる。成績はとてもいい。数学、国語が得意、苦手は理科。勉強も学校もやや好きで、宿題は自分からやり、友人関係もわりといい。生活習慣は自立しており、テレビも自分で決めた番組を見ている。

④親子関係：わりと気があっている里親子。結構話をするので面白いと思うことがあるが、気分的に難しい子。できるだけ叱らないようにしている。年齢的に上から目線だと反発する。

⑤精神的に疲れた時に、養育を返上したいと思ったことは何度もあったが、夫婦で話し合うと、「もう少し頑張ってみよう」と思い、今日に至っている。夫婦で同志として共に考え、共に生き、共に進む、がモットー。

６)その他：
里親同志のつながりは密接で、里親同志の交流が盛ん。「あの子はうちに来ていたかもしれない」という気持ちを抱くからだろう。ボランティア、バイトなど紹介し合う。イベントなどに連れて行くので、里子はみな兄弟同様。「里親は里子がいて、初めて里親」である。(以上)

Ⅳ)いくつもの波を乗り越える

21．幼稚園ではしっかり者だが鬼と暗闇を怖がる子
―種々の試し行動を乗り越えて

１)概要：
Ａ(４歳女子)は施設から来た子で、幼稚園年中組の４歳から現在で７ヶ月目。
実母から９カ月で乳児院に預けられた子。乳児院にいた時には、母親は何回か面会に来たそうである。(親が面会にくる子もいるが) Ａの親が面会に来ないことを、施設の担当者が「あなたは何も悪くないんだよ」とＡに言い聞かせたとのこと。

２)里親の家族構成：
里母は専業主婦で、40代、里父は50代で勤務者。実子はない。Ａを含め３人家族。Ａは初めて預かった里子。

３)里親登録の動機：
長いこと子どもに恵まれなかったので、実子をあきらめて。里子に愛情や温かさが伝わる環境で成長してほしいと思ったから。

４)事例：
Ａ(４歳女子) (幼稚園年中組の４歳から、現在で７ヶ月目)

①里母を嫌う：
交流期間は４か月で、その間にもいろいろな試し行動が続いた。里父にはなついたが、里母

を排除しようとした。お正月は４日間家に泊まった。Ａは「里父は優しいから大好き、里母は優しくないから嫌い」と言う。外泊のたびに、〇〇ランド等へ連れていったが、施設の担当者と相談してやめて、なるべく家で過ごすことにした。

②種々の試し行動を乗り越える：
　初めの３カ月は少し意に反することがあると、言葉で説明せず、大声で泣いたり、ぶってきた。服を着替えなさいと言ったとたん泣く。泣きだすと泣きやまない。こちらが泣きたかった。今思うとストレスがたまっていたのだろう。「警察が来るよ！」と言うと泣きやむ。ぶったりけったりしてくることが続いた。ダメと言われたことをわざとする。土足はダメと言うと、わざと土足で上がる。赤ちゃんと思うことにした。
　波があった。ひと波超えるとまた次の波が来る。しつけをするようになると、反抗する。半年位は里母に、それ以後は里父に対して反抗した。「だっこ、だっこ」とやたらに言う。言い出したら聞かない。

③外ではしっかりした子と言われる
　幼稚園は年中組に入った。幼稚園ではしっかりしていると言われる。施設で集団生活をしていたので生活習慣が確立していたのだろう。幼稚園では英語とミュージカル（歌って踊る）のクラスに入れている。現在では、とても大変だと思うことはない。

④健康と発育：やや便秘気味だが、問題はない。

⑤性格：甘えたがる、多少ムラっ気がある。陽気な性格で、何でも興味を示し、大人のやることを何でもやりたがる。こわがりで、鬼と暗闇をひどく怖がる。寝起きは、しばしば不機嫌。食事や歯磨きに時間がかかる。

⑥親子関係：わりと気があっている。叱る時は遠慮なく叱っている。

⑦相談相手は◎自分の親、〇隣近所の人、友人、里親会の仲間。カウンセリングは受けたことがない。

⑦養育の返上は１度も思わず

５）その他：里親は一方が死んだら子どもを返さなければならない規則。実親でもそういうことがあるのに、おかしいのでは。（以上）

22. 小３までの荒れた行動も落ち着いて「25歳迄この家に居る」と言う15歳
—共働きで塾と学童クラブに通わせながらの子育て

１）概要：
　Ａ1　５歳女子中学生（3歳から12年間）
　親の事情で施設に入る。施設に居る時に親はたまに面会に来ていたようだ。

２）里親の家族構成：

里母は40代で勤務者、デスクワークのフルタイムだが、中抜けもでき、残業もしないでいいとのこと。里父は50代で勤務者。里子(ＡとＡ2)２人と４人家族。

３)委託動機：
実子がいないので、子どもがほしくて里子を預かった。一昨年は一時病気の子も預かって、里子歴３人目。

４)＜事例１＞
15歳女子中学生Ａ

①発育と健康：とても―偏食、やや―太り過ぎ、食べ過ぎ

②性格：わりと―わがまま、素直でない、言葉が乱暴、感情の起伏が激しい、初めの頃は、すぐ暴力に出た。反省心がなかった。

③学習状況：成績は中の下、得意なのは数学、苦手は英語、勉強はやや嫌い、学校へ行くのはとても好き、宿題は自分からする、友達関係わりといい、受験、思春期、反抗期が重なって、時々機嫌が悪くなったりする。
高校進学は推薦で決まった。部活はバレー部

④親子関係：小４まではママ、小５から、お母さんと言うようになる。実親は、入学後居場所が分かった。真実告知は小１の時で「本当のお父さん、お母さんではない」と言うと、「知っていたよ」と言う。乳児院のアルバムに、違う名字で名前があったので分かったと言う。幼稚園から里親姓で通してきた。親にはいずれ会ってもいいけれど、「一緒に暮らす気はない」と言う。
将来のことも、「18歳までは居ていいよ」というと「25歳まで居る」と言う。「居られても困る」などと(のびのび)言いあっている親子。
Ａは「大学に入って、先生になりたい」と言う。「公務員はいいよ」と里親から言われての動機のようだ。
親子関係については、わりと気が合っている。里父里母と外出するのが好き。叱る時は遠慮なく叱っている。一度、あまり部屋が乱雑なので、里母はキレて美容院に行ってしまった。しかしその後も直らない。

⑤困ったこと：
当初(３歳)は、お店の品物などについて、自分の物と人の物の区別がつかなかった。その後は、学校でトラブルを頻発。男の子と遊ぶ子で、身長が高く、自分ではそんなつもりはないけれど、「叩いた、蹴とばされた」などの苦情が絶えなかった。先生からも、親からも毎日のように電話がかかってきた。表現がうまくできない部分で、行動に出てしまう。虫が好きで、ダンゴ虫をとってきたりして、友人に見せてびっくりされるなど。グループには入らず、単独で行動する。身長は、初め首一つ大きかったが、小学校高学年で抜かれてしまった。
その他、お金の持ち出しが度々。１万円札など(何万も)持ち出して、友人におごってしまう。万引きなどはせず。おつりは穴を掘って埋める。泥棒が入って、お金だけ持って行ったなどと嘘をつく。小３、小４の頃は大変で、追及されると土からお金を掘り出す。万引きの件で、保護者会が開かれたりした。
４年生から落ち着いた。保育園の時は友人にちょっかいを出しても「いいですよ」と言ってく

れる母親が多かったが、小学校はそうした父母たちではなかった。

⑥相談相手：◎自分の友達、里親会、担任，児相の職員、Ａのカウンセリングを児相で受けた。

⑦何度か委託解除を思った。学校でのトラブルがおさまらず、先が見えなかった頃に。でも家に居るときは素直な子だったので、大きくなれば、きっと本人も周りが見て、自分がどうしたらいいか気がつくだろうと、期待していた。現在は期待したように、考えながら行動している。

＜事例２＞７歳男子

下の男の子（A2）はＡと８歳違いで、預かる時Ａに相談した。女子を預かりたかったが、該当者がいなかった。委託されたのは小学校入学時で、交流は３カ月。泣き虫で、おしゃべりで、かわいい。頭がいい、いい子。成績はよくないが、大人と会話ができる子。

児相は「大変ですよ」と言ったが、そうではなかった。そこの施設は幼児のみの施設で、小学校に行く時は、別の施設にいかなければならなかった。

２人とも、部屋にこもらないで、居間で勉強している。働いている里母が居ない留守には姉は塾、弟は学童クラブに行っている。２人は喧嘩（言い合い）もするが、ベタベタではなく、ふつうに仲良くしている。（以上）

23. 無表情な子が里親の翼の下で自分を取り戻す
－苦労も喜びも一つの記録に残してお互いに伝え合っていきたい

１）概要：

Ａ（ほぼ２歳　男児）１歳８か月から現在まで３か月間養育。実母は未婚の母で育児放棄し、Ａは生後すぐ乳児院に預けられ、実母の面会も３回で途絶えたとか。

２）里親の家族構成：

実子２人（10代前半と９歳）とＡとの５人家族。里母は30代で専業主婦、里父は40代で勤務者。

３）里親登録の動機：２人の実子を育てた後で、３人目を医療事故（カテーテルの誤挿入）で生後２か月で亡くす。死のうかと思うほどショックを受けた。しかし、２年かけて気持ちを整理し、里子を育てることをバネにして立ちなおろうと思った。里母は子どもが大好きだった。交流は３週間、毎日乳児院に出かけた。泊まりも。最後は乳児院に返そうとしたら泣いたので、愛着形成は大丈夫と思った。１歳８カ月の時点では表情がなかったので、くすぐりから始めた。その都度、笑いかけて対面するようにした。日に日に成長。２、３カ月で表情が豊かになった。施設養育されることの２次的虐待の言葉が思い当たった。

４）乳児院の環境：

乳児院ではＡは元気な子で、乳児院では相手にすぐ噛みつく子だったという。

乳児院は年齢の近い10人単位のグループで、危険のない部屋に、おもちゃも時間によって、次々次のセットに代わる。興味の個人差や持続は無視される。３人の元気な子のグループにいて、噛み合っても泣かない子だったという。乳児院では、その子だけのぬいぐるみ（所有権の確保）は最近になって、担当と一緒に買いに行くようになったとか。服は名前がつき、靴下は共有。個人の引き出しもある。

5)里母について：
　里母の実母は教師で、里母はおとなしい子だった。里子希望の際に、きょうだい間のやきもちを心配して、２人の実子との年齢をあけたかった。男の子の希望をして希望通りになった。今現在は、実子と里子の関係は非常にうまくいっている。年が離れていることが幸いだった。Ａに対して実子２人はやきもちを焼くことはなく、多少Ａが勉強の邪魔や大切なものを触るなど、いたずらをしても、上手に対処しているようだ。
　実子と差をつけてはいけないとの信念をもっている。ネットの「羽ばたけ養護施設出身者」のサイトで見ると、実子と差別されたとの書き込みが見られるので気を配っている。養子縁組は人気が高いようで、３倍。数年待たなければならないので、養育家庭にした。

6)Ａについての補足：
①Ａは外遊びが大好きで、元気過ぎて参るほど、うちの子になっている。健康面は問題なし。夜尿があり、まだおむつが取れない。

②性格：落ち着きがなく、気が強く、強情。すこし人に心を閉ざす。甘え上手ではない感じ。しかしこれらは一つの個性かと思う。

③親子関係はとても気があっている。前向きで、叱られてぐずぐずするところがなく、さっぱりしていて、育てやすい。叱るときは遠慮なく叱っている。

④相談相手：◎友人と里親会の仲間、すこし隣近所や児相の職員と。カウンセリングは受けたことがない。引き受ける時、児相からかなり詳しくキャリアを説明された。

⑤養育の返上は考えたことがない。

7)その他：障害児と知って養育する里母をどう思うか(面接者)
　「そうした里親さんもおられます。自分だったら、預からなかったかもしれない。障害の有無については、最初の登録時に確認されます。私たちは『ごめんなさい、できれば障害のない子を』とお願いしました。それは、私たちの生活があまりにも変化することへの恐れからだと思います。今の生活をなるべく変えずにできることとして、里親になりました。

8)里子養育についての里母の意見：
　養育家庭では、自分は「ここに居てはいけない子、居させてもらっている子」と思っている里子が多いのではなかろうか。また18歳までとの期限付き受託を、当人にどう受け取っているのだろうか。里親不調、措置解除はもっと簡単にできるようにして、「うまくいかなければ、外に出していいんです」と研修の時に職員が表明してくれたら、里親にとっても里子にとってもいいのではないか。「頑張ろう、さもなくば返す」の２者択一ではなく、不調を肯定的にとらえる方がいいと思うし、里親不調を里親失格にしないでほしい。仲間を見ていると、ギリギリ迄１人で抱えているケースもあるのではないか。だから杉並事件のようなことが起きる。あの里親は自分と同じ支部の里親会のはずが、１度も集まりに出てきていなかった。里親会は重要で、そこにいいリーダーや専門家がいることが必要だ。

　里親不調を簡単にするというよりも、委託の際に、また、紹介やそれ以前の研修の際に、里親不調が起こる現実と、数と、理由をしっかり耳にしておくことが必要だと思います。都とし

ても、説明をしっかりするようにすてほしい。それを知った上で、「私は大丈夫、何とか頑張ってみよう」と養育を始めた場合に、あとで数々の困難を経験した際にも、参考になると思います。苦労しているのは、自分だけではないと。

また里親子は、間違いなく親子として生きていますが、親子という縛りではなくて、＜一緒に生活する、食べる、時間を過ごす、同居する＞愛すべき相手として、相手を考えるようになっていく道筋を、誰もがたどるのだと思います。相手を限りなく尊重したかかわりの中で、お互いがかけがえのない大切な存在になっていく。それが理想ではないでしょうか。

しかしそれが、うまくいかないこともむろんあるでしょう。里親子だから何があっても----という縛りは、初めから取ってしまったほうが、お互いに肩の力が抜けるのではと思います。簡単に預かって、簡単に返すという方向ではなくて。

②また、こうした養育家庭の努力の日々を、何らかの記録にのこして、次の人々に伝えていくことも大事なのではないでしょうか。養育家庭で育つ子は、年齢も背景も性格も能力も、みなそれぞれに違います。里親もそうです。とすれば、里子育てもそれぞれに違うでしょうが、苦労も喜びも一つの記録に残しそれを伝え合っていくことで、孤立しない子育てができるのではないでしょうか。それは、里親ばかりでなく今は全ての親について言えることかもしれません。（以上）

Ⅴ）里子の自立と18歳問題

24. 知的障害児だった里子が自立して
―就職後も休みのたびに里親宅に泊まりに帰ってくる子　＊被虐待児

＊里母が虐待の影を感じるのは、怒られると落ち着かなくなるが、また繰り返す点がそうだったかもしれないとのこと。

１）概要：

Ａは４歳で保護され６歳から13年間預かったが、現在は自立して清掃員として病院に就職、知的障害者の同僚が６名いる。月給８万５千円で、通勤寮に住む。

通勤寮は３年間と期間が決められているため、その後はグループホームを考えている。となると今の給料では足りないが、20歳過ぎると障害者年金も支払われる予定である。

広島在住だった実母は、実父の虐待から逃れて、兄と本人Ａを東京に連れて逃げてきて、当初アパートで暮らしていたが、育児ができない実母だったので通報されて、子ども２人（兄とＡ）は養護施設に保護された。実母は施設にいて、兄は現在老人ホームで働く。Ａは兄に会いたがっているが、兄からは連絡がない。

２）その頃の里親家族（４人家族）：

里母は50代で、怪我のため仕事をやめて専業主婦、里父も50代で勤務者。現在は実子１人と里子Ａ2（11歳で、３歳の時から８年間養育。里子の２人目）を育てている。実子は現在30代１人と20代後半が２人。里母は「これからも多くの里子を育てていきたい」と言う。

３）里親登録の動機：

里母は職場の階段から落ちて怪我をし、うつになる。里親募集の東京都の広報を見て、今の

自分には「子育てしかない」と思い、里親登録をした。１年待った後でセンターから連絡があり、紹介された子どもと会ってみると、ニコニコして可愛かったが、６歳なのによだれを出していて、養育は無理だと思い断ったが、職員に「今度はいつ会いに来てくれますか」と言われて、「あさって」と言ってしまった。

４）事例
＜事例１＞―自立後も里親といい関係でいる
Ａ：（19歳女性）（６歳から18歳迄養育）　＊被虐待児

①初めの頃：
初めのうちはとくにトラブルはなかった。センターから知的障害児と聞いてはいたが、里母はそうは思わず、「手をかけられていないからだ」と思っていた。小学校は普通クラス。しかし、中学校では特別支援学級に入ったが、物足りない様子だった。高校は「特別支援学校」に入学。部活は陸上部と合唱部に入った。能力にバラツキがある子で、人前で発表するのがとても好きだったから「これでいいのだ」と里母は自分に言い聞かせていた。
中学になると支援学級で過ごすのは物足りないらしく、外でぶらぶら過ごすのが好きになり、家に帰らないことが度々で、里母の血圧が上がる。家に帰らなかった日は警察に捜査依頼もした。しかし本人は警察へ連れ戻しに行っても「お母さん遅かったね」などと平気。実子も里父も探すのに協力してくれた。
現在、職場から家に帰って来るとカレーと焼きそばを作ってくれる。しかし同じルウを使うのに、シチューは作れない子。

②学習状況：
小学校の成績は中の下で、国語が得意、苦手は算数だったが、九九は早く覚え、分数は得意だったが、勉強は嫌いだった。里母がそばにいて教えると頑張るが、一人にすると遊んでしまう。自分で宿題をするようになったのは、高校から。
家では、生活習慣が確立していなかった。しかしモノをほしがらない子で、そのために万引きに走らなかったのかもしれない。

③思春期のむずかしさ：
小さい頃は、嬉しそうに学校へ通うＡを見ているだけで、里母は幸せだったが、４年生位から、放課後に外でフラフラすることが好きになり、気がつけば暗くなっていて、家に帰りそびれ、散歩中のおばさんに連れ帰ってもらったりした。ある時はパトロールしていた警官に保護され、パトカーに乗ったのが嬉しくて、家が分からないと二時間もぐるぐる回ってもらって、警官から電話が来た。フラフラ歩きは中学時代が多く、突発的だった。高１迄、心配のし通しだった。高校生になる頃には、行く場所も分かってきた。１人で公園、公民館、校庭、時計のある市役所の広場、学校の行事で歩いた道、公園などを歩いていたようだ。
ところが高１の夏休みに里父からこんこんと説教されて、それで出歩くのが止まった。どうして里父の説教が効き目があったのかは、今もって不思議に思う。

③健康と性格：
受け入れた当時は身長が小さく、小柄で足もサイズも15センチとちいさかった。今も身長は高くないが、足のサイズも23.5センチとなり、やや小太りとなっている。性格は、誰にでも甘えたがる、嘘をつく、約束を破る、反省心がない、やや無気力、わがまま、すぐ泣く、素直で

ないなど。しかし明るい性格で、姉ご肌だが、職場では上司、先輩などの区別がつかないらしい。里親が万事優しくしたのがいけなかったのか、言葉遣いが悪く、里母にため口をきく。

⑤親子関係：
わりと気が合っている。叱る時も初めは怒るにも気を遣っていたが、いくら言っても伝わらないので、叱る時はきちんと叱るようになった。ほめるときはほめる。自立後の思い出づくりに里母と２人で出かけたり、バス旅行もした。

⑥何度も養育の返上をしてしまおうかと考えた。しかし、今までの努力の日々を無駄にしたくなかったので、養育を続けた。

＜事例２＞将来養子縁組も
A2（11歳）は、３歳から預かって８年目。母親はシンナー中毒だったとか。弟が２人いるはずだが、コンタクトはない。できれば措置解除後に養子縁組をしたいと思っている。

５）その他：
Ａには、礼儀作法を身につけさせたいと、詩吟とお茶を習わせていた。A2には塾も２か所に通わせているが、小学生なので費用は支給されない。児相の職員からA2を預かった後で、「初めの子（知的障害児Ａ）は大変だったでしょうが、この子はいい子で、プラマイゼロ」と言われたが、その言葉に傷つく。そういうものじゃないでしょう。（以上）

25.（収録否）家事分担に責任をもたせると、「この家に居ていいんだ！」と思うようになる
―里子の将来を見据えてしっかり育てている里母

26. 自立が危ぶまれる子、すでに自立した子、措置変更した子
―５人の里子を預かる中で

１）概要：
高校１年生女子Ａ（15歳）（現在迄10ヶ月養育）　＊被虐待児

＊里親の感じる虐待の影は、実親の話題の時に涙を流したり、深夜の電話に実母からかと心配するなど、いまだ不安が持続しているようだ。

２）家族構成：
里母は50代で非常勤職、里父は50代で、現在は父の跡をついでいる宗教関係者だが、長らく児童福祉関連の職員だった。里子と３人家族。実子は30歳、27歳の２人。里子養育の経験は５人。元里子は、21歳（17年養育）、18歳（７年）、18歳（６か月）、15歳（６か月）、15歳（10カ月、現在養育中）

３）里親登録の動機：
里親は30代前に３番目の実子を亡くした。その後１年半で里親登録をして、短期、長期に５人を養育した。

4)＜事例１＞　受託解除後を案ずる里親：
現在高１の女子Ａを養育中(10か月経過)
①受け入れの動機：
Ａは母子家庭の２女で、母親はメンタルな問題をもち、小４から本人を虐待した。母の指示による姉からの殴る蹴るの暴力と「お前を生まなければよかった」などの心理的虐待があった。母の調子が悪いと、食事を全く作らない、部屋が散らかり本人の学習場所がないなど、養育放棄があった。だが実母との愛着形成ができた後での虐待だったようだ。児相からの強い依頼があり、受け入れないと高校進学ができないとのことで預かった。

②発育と成長：
子ども病院の心の療科に自殺未遂で入院１年余。病院から里親宅へ来た。現在も服薬中。寝つきがわるいことがある。月１回診療科で里親が面接を受け、本人は数カ月に一度受診を続けている。

③性格；少しわがまま、思ったことを(友人にも)その場ですぐ言うのが苦手。
楽な方に流れる性格で、反省はしてもなかなか行動が変えられない(家事や勉強など)
④学習状況：成績は中の上、得意な科目は国語、苦手は数学、勉強はふつうに好き、中１の後半からずっと不登校だったが、高校は欠席せず通学。友だち関係はわりといい。

⑤養育上の難しさ：
価値観や生活スタイルが違っていて、どのレベルで折り合いをつけるかが難しかった。下着、日用品等、母の価値観で高価な物、よい物を日常的に使っていたため、スーパーなどの安売り品は好まない。温泉入浴、アウトレットでの買い物、おいしいレストラン、お取り寄せのケーキなど、里親の生活レベルと異なっていた。それまでの子は大抵こちらが買い与える新品は喜んだのに。

⑥親子関係：
時々気持ちが通じない。「ありがとう、すみません」のあいさつ、要求、頼みたいことは、はっきり表現する。しかし里母が忙しくしていても、本人は何も関心を示さず、手伝おうと言う雰囲気が見られない。また自分で「明日〇〇をする」と予告しておきながら、朝起きなかったり、面倒でやめてしまったり、そのため時間調整をしていた里母をいらいらさせる。学校の体制や怠ける友人の批判はよくするが、こつこつ積み上げることは苦手。これもはじめは叱るのを我慢していたが、里母にストレスがたまってしまい、感情的にならない範囲で叱るようにした。思ったことはその都度注意している。

⑦相談相手は、児相（◎)、里親の友だち、こどもHPの担当職員。カウンセリングを本人が何度か受けている

⑧委託の返上を思ったことはないが、不登校のキャリアがあるので、その時は考える。

⑨心配していることは、将来、委託解除後の生活
1．進学を希望しているが、勉強の意欲や習慣に欠ける。現在は勉強を始めているが。経済面も見通しが立たない。
2．実母との関係が18歳までに改善されるかどうか。

３．人とのコミュニケーションがうまく取れるようになるか

＜事例２＞すでに自立、現在も交流がある

A2(21歳女性)：

１歳９か月から17年間養育、現在21歳。IQがボーダーラインで、小３から授業についていけなくなった。友人間で孤立、チックや「かん黙」があった。私立高校を出て、現在はリネンサプライの工場に就職したが、１年半の寮生活の後、自分から退職。今は実母方の祖母と同居。バイトをかけ持ちの生活。里親との交流もある。

＜事例３＞

A3(18歳男子)：

①小２から中２まで７年間養育して虚言と里親宅からの金銭持ち出しで措置解除、喪失体験の整理と心理治療が必要な子であった

②本人出生前に両親が離婚、母と２人暮らしだったが、年長の時母が自殺。本人が第１発見者だった。その後引き取って育ててくれた母方の祖母も半年後に病死。叔母の家に行ったがすぐに手離された。小学校入学前に、ある里親へ委託されたが１年余で措置変更。小２で里親宅へ。自己紹介は「お父さんは僕のことをいらないと言った」。沢山の喪失体験を重ねた子だった。しかし中２で養育を返上した。その後養護施設に入り、そこから出て中卒で就職したが、１か月で飛びだし行方不明となる。里親宅に近くでホームレス生活を続け、里父の寺に盗みに入って、現在は少年院にいる。盗みは3.4年生から始まった。

５)その他：現在の社会的養護についての里父の意見

１）とりわけ難しい問題をもつ里子を受け入れることで、夫婦間にもめごとが発生、実子からクレームが出て、家庭が崩れる例もある。困難事例の対応のむずかしさがある。

２）トラウマティックな経験を抱えた子どもには、専門家の支援によって、体験を整理することや心理治療も必要である。

３)子どもには、寄り添ってくれる人の存在と、そのための関係作りが何より大切。

４）「真実告知」は里子を育てる過程での大きな課題。子どもの成長段階に合わせて、無理なく、自然に何度もしていく必要がある。大きくなってからでは、思春期の不安定さに加えて、「大事なことを隠していた」と里親に不信感を抱くことも出てくる。途中で、外から実子でないという情報が本人の耳に入って、里親への不信感を引き起こし、大もめになることもある。

５）18歳以降の自立支援が社会的養護の最大の課題ではないか。

６）ふつうでも高卒で就職するのが難しい現在、里子だった子どもの就職はいっそう困難である。就職の際に保証人を探すのがとりわけ難しい。児相長などが保証人になれればいいが、千葉、神奈川などには、県レベルでの対応システムもある。

７）自立支援には、障害者同様に居場所と相談支援が得られるグループホームのようなものが必要だと思う。

８）しかし、福祉の仕事に就くには一般にキャリアや資格がいるが、里親は情熱があれば誰でも里親登録することができ、情熱があれば誰もが参加できる仕事である。(以上)

29. 勉強より人生で食べていく術を習得させたいという里父
－20人の里子を育てた日々の中から

1)概要：

A(16歳男子) 15歳から現在までで1年間養育　＊被虐待児

現在高校1年生、中学3年夏に里親委託。Aは3人兄弟だが、父親が皆違うらしい。実母がAの発達がゆっくり目であることを受け入れられず、家庭内で罵倒することもあり、兄弟の中で劣位にあったようだ。里親に預けた契機は、妹への性的悪戯であるが、母親の養育放棄が背景にあり、一種の心的虐待とも言える。ただし、児童相談所は虐待の表現は使用していない。

2)里親の家族構成：

里父は60代で元児童福祉関係者、里母も60代。里子はAのほかに、現在15歳A2、元里子23歳A3(初めて預かった里子、現在は同居人)の5人家族。

実子は、30代前半と後半の2人。自立した里子はこれまで20人位(うち短期受託が5人)半分位は自立してからもコンタクトしてくる。

3)里親登録の動機：

里父は、世の中一人ずつ余分に子育てすれば、保護の必要な子供は随分救われるだろう位に軽く考えていたという。里母には、既に亡くなったが障害のある実兄がおり、グループホーム的な生活を考えたこともあったらしい。他人と一緒に生活を共にすることに違和感が少なかったようである。

実子二人が自立し、家の中ががらんとした感じがして、夫婦とも3人目の子供がいてもいいなという感じになった。フレンドホーム(全国的には季節里親に近い制度)で子どもを預って欲しいという話に出会う。交流を進めて行くうちに、これなら出来るという感じを受けて、里親をすることに切り変えて行ったという。

4)事例

A：(16歳男子、特別支援学校高等部)

①Aの養育動機：すでに多くの子ども(20人位)を短期的にも長期的にも受託していて、子供を選ばないという方針を掲げていた関係から、児相からの依頼で即日受託した。

②発育と性格：わりと―偏食で、運動神経が鈍い。
とても―劣等感が強い。わりと―人みしりで小心、
自信を無くしているので、回復させたいと思っている。

④学習状況：成績下、本を読むことが得意、苦手は体育。勉強はとても嫌い。学校は特別支援学校高等部だが普通に通学。宿題は言われてする。友達関係はあまりよくない。

⑤親子関係：里母とはわりと気が合っている。叱りたいことがあっても、できるだけ叱らないようにしている。里父とも「それでは社会に通用しない。出て行け」などと、何でも言える関係。

⑥相談相手：里母

⑦心配なこと：勉強より、人生で食べていく術を習得させたい。

⑧これといって、大変に感じたことはない。「不登校、学業不振、児童精神科通院中、人間関係作れず、広汎性発達障害、てんかん薬服用」と、申し送りの書類には記されていたが、中学３年後半になって、特別支援クラスに変更し、里親生活を始めて見ると、ほとんどの課題が表面化せずに済んでいる。

妹とのトラブルは、家族からスケープゴートにされた結果であることが見えてきた。

高校受験については、主治医を交えて関係者と話し合い、一人で食べて行くことに視点をおいて選択した。高校生活はスムーズにいっている。てんかんのための通院が続けているだけで、里親としては、問題行動に出会うことなく過ごしている。これまでも、こんなケースが多かったので、またかという感じで、苦労話はなかった。

⑨委託を返上したいと思ったことはない。

５）過去の里子の事例をめぐって

里父は仕事柄、難しい子供の対応には感覚が麻痺しているので、大変な思いは余り感じてこなかった。里母は、日々の生活で負担は感じていたと思われる。

最初に養育した子は、今でいうADHDだったのか、学校になじまず、劣等感を増すばかりだった。このまま進めると展望が開けないと判断して、社会から一歩引いた環境で暮らさせるようと提案するまで数か月、種々思案した。施設に措置変更を申し出、その後も、あなたを見捨てたのではないことを伝えるために、里母はこっそり子どもと文通をしていた。高校１年の夏に子どもは里家に戻ったのだが、展望のない見えないシナリオの流れにいる時の不安は、里母には大きなものだったと思われる。（以上）

Ⅵ）措置変更とジェンダー問題

２．手に負えない盗癖と３年半苦闘した末に委託解除された里親の心情
―様々な行動改善プログラムの試みと神への「祈り」もむなしく

１）概要：Ａ（14歳女子中学生）　11歳（小６）から３年５か月養育し、本人の希望で委託解除される。

実母の交際相手から性的虐待を受けていたため、里親委託になった子。
実母は知的に障害があり、たびたび帰宅しなかったこともあったが、夫の死後何人かの男性と交際していた。男性の中には車上生活者もいたと聞く。

２）里親の家族構成：里母は小学校教員で50代。里父は自営で60代。共にクリスチャンで実子は４人。現在は実子１人(21歳)と同居し、３人家族。

３）受託動機：

Ａは里母の元の勤務校の児童で、転勤する時にＡの生活が気になっていた。１年後児相から委託の打診があり、Ａの役に立ちたいと思い引き受けた。Ａは中度の知的障害があり、自立のため助けが必要と考えた。

４）事例

A（引き受けた当時、小６女子）

①性的虐待を受けていた影響からか、里家に来てすぐからの性的行動：

1．人にすぐ抱きつく

2．歯医者の受付の方や担任の腕にキスをする

3．投げキッスする

4．初めて会った男性にも抱きつく　等が見られた。

中学生になってからは、レスパイト先の里親宅で他の女児と入浴中、自分のプライベーゾーンをなでて見せたり、相手の陰部を覗き込むなどの行為があった。また、自宅でインターネットの「エッチ」というサイトを開け小2の一時委託児童に見せていたこともある。

②健康と生育：身長が低く痩せていて、委託された時は小６年なのに小３年に間違えられたほどであった。夕食後、毎日のように「おなかが痛い」とトイレに行った。

よく転び、腕に擦り傷をつくる日が多かった。喘息発作のため入院。日中のおもらしが時々あり、夜尿は毎晩あった。中学になって体力がつき、あまり転ばなくなった。喘息もコントロールできるようになった

③性格：わがまま、気分にむら、幼児のように大声で泣く、喜怒哀楽が激しい。

（悪いことしたとき、「どうしたの」と軽く聞いただけなのに、大声で泣き続ける）過敏（小さな怪我でも、ものすごく痛がる）だが、気持ちの切り替えは上手で、今泣いていたかと思うと10分後にはけろっとして笑っていた。叱られても、根にもたない。毎朝、元気に挨拶し登校していた。人懐っこく、自分から人の中に入って行くことができる。新しい環境に適応しやすかった。

④学習状況：成績は下、特別支援学級に在籍。

受け入れ当時（小６）は、お金の計算や時計を読むこともできなかった。漢字を書くのが好きなので、中３年で漢検に挑戦し、７級に合格した。思考を要する問題は難しいが暗記力はある。英語、体育が好き。手先は器用（細かい切り絵を、カッターで見事に仕上げた）。学校が大好きで、毎日楽しそうに通っていた。

⑤愛される性格の持ち主：里母は音楽の好きなＡに、音楽部活動、音楽教室、地域ミュージカル、地域老人とのラジオ体操、子供会や地域行事へ参加させ、教会にも行かせるなど、人と交流できる場を積極的に作った。明るいので高齢者から愛された。また、小さい子の世話が上手で、地域の小さい子とよく遊んでいて、幼児のお母さんたちから感謝された。犬が大好きで、自宅の犬の散歩を好んでしてくれて、地域の犬の名前はほとんど知っていた。

⑥生活習慣：学校からのお便りは、きちんと見せてくれた。学習に必要な物は自分で準備できた。しかし、部屋を片付けさせると頑張るが、翌日には散らかっている。脱いだパジャマは床に置きっぱなし。汚れた下着（尿や生理の下着）を洗うのが面倒なのか、時々かくす。トイレや湯船で寝てしまうこともあった。

⑦里母にとっての失望：一人っ子で育ったせいか、自分にはしてもらっても、家族のために自分から何かをしてあげようという気持ちが少ない。少し手伝いを頼んだだけでふくれっ面をする。自分でできることも、誰かにやってもらおうとする。

⑧盗癖に手こずった日々：

1．家族の財布(里母や里父)からお金を抜き取る。

2．どこからか6万円持ってきて、自販機の下に隠し友人に分ける。

3．褒められる機会を増やすと盗癖が改善されると思い、好きな英語を習わせると先生の携帯電話についているストラップ欲しさに盗り、携帯を使用不能にした。

4．店からの万引きが数回

5．地域の集会所や文化センター、学校から、備品を持ち帰る(数回)

6．同居していた他の里子の財布から、お金を抜き取る

7．学校の生徒のかばんからお金を盗る。(数回)

8．友人の家に遊びに行き、CDを持ち帰る。

⑨様々な対応の試み：

里母はペアレント・トレーニングを学び、AにはSST（ソーシャルスキル・トレーニング）を受講させ、親子の関わり方を学んだ。だが改善されないので地域の障害児SV（スーパーバイザー）はじめ、教育委員会、児相、児童デイケア職員と話し合い、夏休みは遠方にあるデイケア施設にも通わせた。

また、月２回地域での障害児のSSTプログラムにも通わせた。人が大好きなAのために、正月や夏休み、ゴールデンウィークなどに、養護施設の子を預かり、楽しい時間を作るようにした。

⑩それでも改善されなった盗癖：

中学２年の３月下旬から４月下旬にかけて、毎日のように問題(盗癖)が続き、その対応に疲れはてて、里母はきちんとAに向かうことができなくなっていた。臨床心理士との面談では、「こんなに悪いことをしても、自分の存在を喜んでくれますか」という子どものアピールだ」と言われた。SVからは「盗癖はなかなか治らない。盗ってきたとき素直に言えることを目標に」と言われていた。里母の対応で少しは改善に望みがあるのかと思ったが、どのようにAに関わっていけばいいのか途方にくれた。

５月の連休は、教会の早天祈祷会に毎朝通い「Aちゃんを愛することができるように」と祈った。

Aに「ちゃんとあなたの話を聞いて上げられなくてごめんね」とあやまることができて、Aも、「自分が悪いことをしたからだよ。おばちゃん、自分こそごめん」と言ってくれた。お互いに悪いところをあやまり、和解ができたと思った。ところが、２週間後音楽を習っている文化センターから、またいろいろ持ち帰り、「どこから持ってきたか」聞くと、「お母さんのところに帰る」と荷物をまとめて出て行った。夜なので連れ戻すと、道路で大声で泣き叫んだ。

Aの盗癖を治すため、児相と相談して、２週間知的障害児の施設に一時入所となった。その間里母は、相談室に行きAへの対応について「家庭内アルバイト等をやらせ、小遣いの額を上げる。買い物に行った時、欲しいもののリストを書かせ、盗らずに我慢できたことを褒めてあげる。小遣いがたまったら、自分のお金で買わせてみては」とアドバイスを受けた。自由に使えるお金も増やした。月２回、若いサポーターに来てもらって、Aとおしゃべりやビーズ製作、ピクニック等楽しい時間を作ってもらった。

⑪心がつながらず：

何度も言って聞かせ、「あなたが幸せになって欲しいから」「お世話になっている人から盗って来たら、悲しむよ」「自分のお金で買おうね」「あなたが損をするよ」と言い聞かせたが、全く効果はなかった。